

# おでかけウォッチャー国内版の進化と訪日版の開発

岡野 秀之、渡辺 隼矢、小柳 真二

## はじめに

九経調では、創立70周年記念事業として開発したDATASALAD（データサラダ：九州地域経済分析プラットフォーム）を2020年4月から運用開始した。全国の地域経済に関する主要データを、手軽かつ有効に利活用するためのクラウドのデータ基盤である。全国47都道府県にユーザーを得ており、年間397万アクセス<sup>1)</sup>をいただくなど利用が広がっている。

ここで培ったデータ処理と可視化の技術を応用して、2022年度から観光人流を見える化できる「おでかけウォッチャー」をリリースしている。当初は、国内生活者の観光に限定されていたが、2024年4月からインバウンドの動きを捉えた「おでかけウォッチャー（訪日版）」の運用を開始した。

本稿では、デジタル観光動態統計プラットフォーム「おでかけウォッチャー」について、2022年リリースの国内版の進化と、2024年リリースの訪日版のデータ特性や分析機能、サービスメニュー等について解説する。

## 1 おでかけウォッチャー開発の背景

観光は、地域経済にとって外貨獲得の重要なひとつの手段であり、重要な地域産業となっている。観光に伴う経済活動を計測するためには、観光客数、滞在時間、消費単価、満足度、リピート率などを把握することが求められる。これらを捉えるために、種々の観光統計が整備されているが、課題も多かった。具体的には、①集計単位が月次で、曜日や日次の動きを捉える

ことができない、②公表時期のタイミングが遅く、即時性がない、③地方ブロック・都道府県別で集計される統計が多く、市区町村などの行政区単位で利用可能な指標が少ない、④観光スポット毎で来訪者数の算出方法が異なり、比較が難しい、⑤集計が困難な観光スポット（繁華街や広場など）が多数存在するなどがある。無論、公的な観光統計から明らかになることは多く、マクロな動向把握や政策立案には有用である。しかし、ミクロな地域の動向把握や個別イベントの効果測定、マーケティング、EBPM測定などで使うことが難しいという側面もある。

そこで、これらの観光統計の課題に対して、その一部分でも解決できないかという問題意識から、「おでかけウォッチャー」の開発を行った。

開発目標として、①集計単位は月次より短い単位とすること、②同一基準で観光スポットなど個別地点・範囲のカウントができること、③準リアルタイムでの情報提供ができることなどを定めた。その実現のため、(株)ブログウォッチャー（東京都中央区）と協業して、同社の有するスマートフォン位置情報データを活用することとした。

## 2 おでかけウォッチャー（国内版）の特徴

おでかけウォッチャーは、「デジタル観光統計を身近に」というコンセプトを掲げ、観光客分析に特化したクラウドの観光人流モニタリングツールとしてリリースした。インターネットを通じたクラウドサービスとすることで、目的とする地域や観光スポットの情報を、「どこで

1) ページ別PV数の計、2024年度

も、だれでも」手軽に取得できることを目指した。

「どこでも、だれでも」という意味では、全国の市区町村、主要観光スポットにおける観光客の来訪者数の把握（来訪地分析：日次・週次・月次・四半期・年次）に関して、基本サービスとして無償で公開している。ブログウォッチャーが提携するスマートフォンアプリを通じて利用者から明示的な同意を得て取得したキャリア横断の月間約3,000万MAU（月間アクティブユーザー数）の位置情報データをベースとしており、その網羅性の高さは大きな特徴となっている<sup>2)</sup>。また、全国の観光スポット（約5,500カ所）の来訪者数を同一基準で比較でき、常時、無償でウォッチできることが最大の特徴である。2025年3月末時点で、無償の基本サービスの利用者数は、全国47都道府県にわたって700名以上となっている。

政府において進められている観光統計のデジタル化とも歩調を合わせ、（公社）日本観光振興協会（東京都港区）が2023年10月から提供を開始した「デジタル観光統計オープンデータ」には、おでかけウォッチャーで活用しているブログウォッチャーの「デジタル観光統計（国内版）」が採用されることとなった。この「デジタル観光統計オープンデータ」は、観光庁「共通基準による観光入込客統計」における「人流データによる観光入込客数の把握」のデータ使用例としても掲載されている。また、おでかけウォッチャーでも、日本観光振興協会「デジタル観光統計オープンデータ」と連動した観光来訪者数の分析機能（名称：デジタル観光統計オープンデータ分析）を無償の基本サービスとして提供している。デジタル観光統計オープンデータとは週次で連携し、日別に関連できるようにしており、より迅速かつ詳細に地域の実態に迫ることができる。

### 3 おでかけウォッチャー（国内版）の進化

有償のプレミアムサービスとして、サービス開始当初から「来訪地分析（利用者が指定した最大2,000カ所の観光スポット情報に基づく）」、「発地分析」、「属性分析」、「周遊分析」の4つの分析機能を提供している。その後、お客さまからいただいたニーズを踏まえて、「来訪者数・周遊者数の発地×属性別クロス分析」などの詳細分析機能を実装し、さらに「旅程分析（宿泊・日帰り分析）」と「時間分析」ができる機能も追加している。各機能には用途に応じて複数の画面（ダッシュボード）があり、現在の画面数は20となっている。

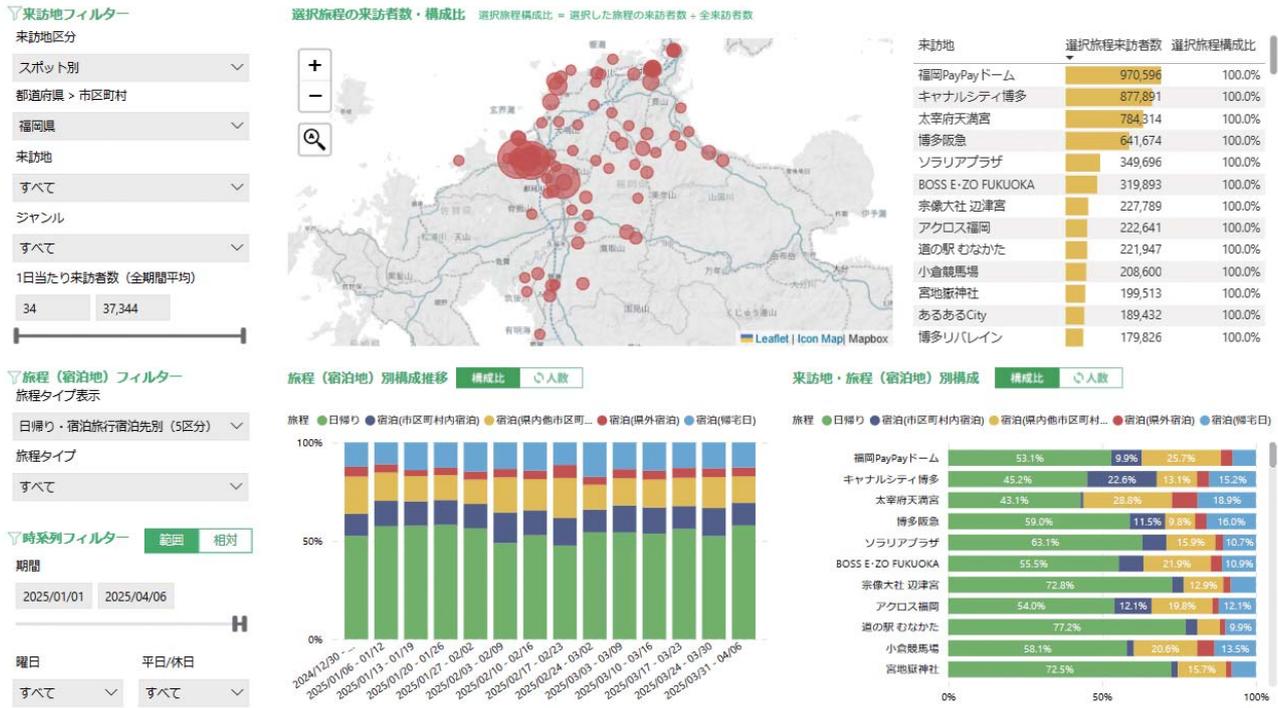
「旅程分析」では、観光スポットの日帰り・宿泊比率の把握（図表1）や、来訪地別の宿泊先の把握（図表2）などが可能である。日帰り・宿泊は、観光消費単価を見定める上で重要な視点であり、その可視化が多くのお客さまから望まれていた。

図表1右下の福岡県内主要スポット別の来訪地・旅程（宿泊地）別構成のデータをみると、キャナルシティ博多（福岡市博多区）と太宰府天満宮（太宰府市）は、日帰り比率が40%台と低い（宿泊比率が高い）という特徴がある。ただし、両者の宿泊先を比較すると、明確な違いがみえる。キャナルシティ博多では、市区町村内宿泊比率が2割を超えている。その一方で、太宰府天満宮では、ほぼゼロである。太宰府天満宮の来訪者は、県内他市区町村宿泊比率や県外宿泊比率、すなわち太宰府市以外の地域で宿泊している方が過半であることなどがわかり、今後の対応の方向性の検討材料を得ることができる。

図表2は、福岡PayPayドーム（現みずほPayPayドーム福岡）を訪れた来訪者の宿泊先をみたものである。約40%が福岡市博多区、約25%が福岡市中央区に宿泊していることがわかり、PayPayドームの地元宿泊への貢献度の大きさが明らかになった。

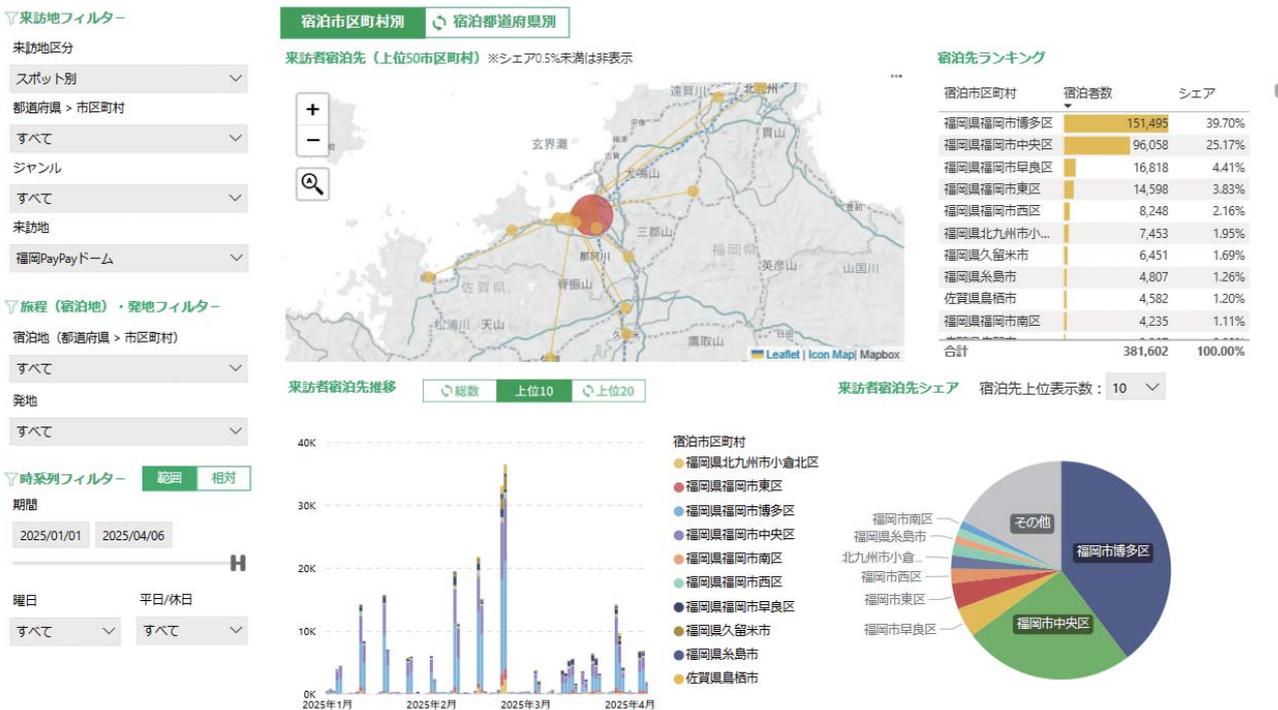
2) おでかけウォッチャー（国内版）の来訪者数の定義は、「発地から20km以上離れ、かつ位置情報ログ（5～15分間隔で取得）が勤務地域でない同一250mメッシュ内に1日2回以上記録された人数をカウント」したものである。これは、国土交通省国土技術政策総合研究所、東京大学、NTTドコモ等で取りまとめられた研究成果に基づいて、ブログウォッチャー社が独自に定義したものである。なお、有償のプレミアムサービスでは、10mメッシュ単位での来訪地設定や、発地からの距離条件変更が可能である。詳細は、岡野秀之（2022年）「デジタル観光動態統計プラットフォームおでかけウォッチャーの開発～観光人流の見える化へのチャレンジ～」『九州経済調査月報 Vol.76-5』九州経済調査協会、ならびにおでかけウォッチャー WEBサイト（<https://odekake-watcher.info/>）参照

図表1 旅程分析(日帰り・宿泊比率)ダッシュボード(福岡県内主要観光スポット:2025年1月1日~4月6日の例)



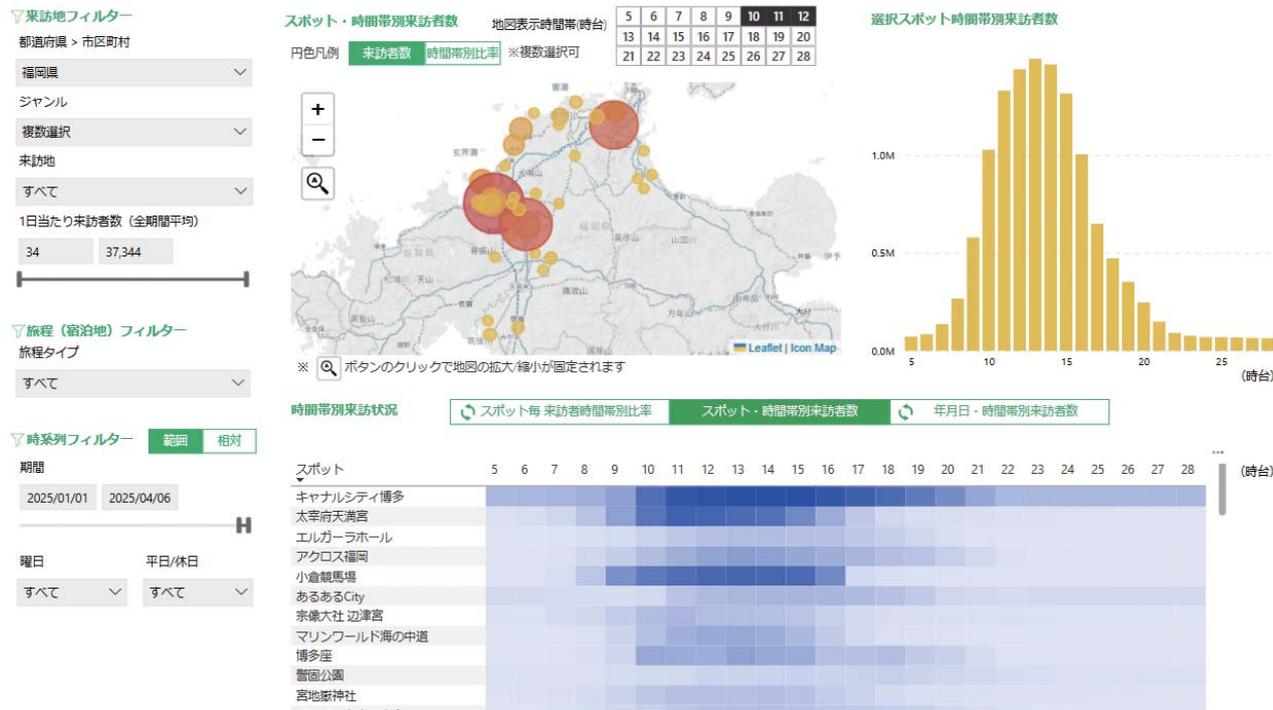
資料) 九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト (https://odekake-watcher.info/) より

図表2 旅程分析(来訪地別宿泊先)ダッシュボード(福岡PayPayドーム(現みずほPayPayドーム福岡):2025年1月1日~4月6日の例)



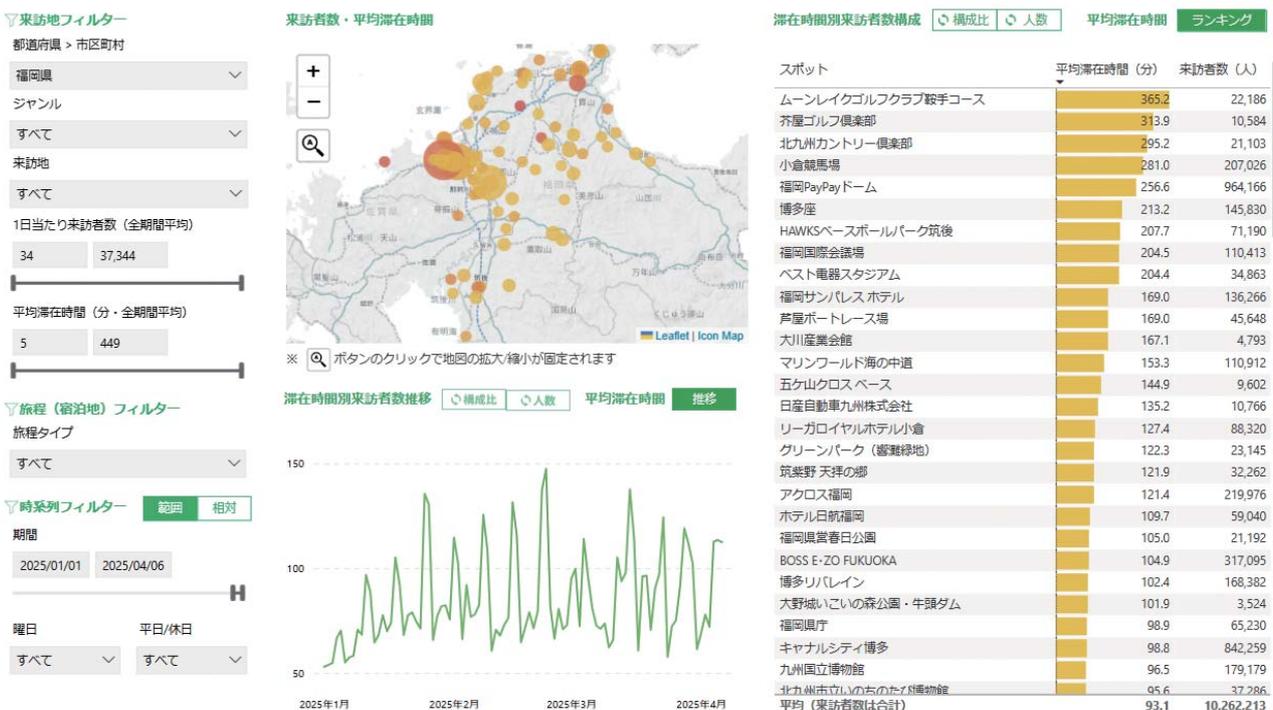
資料) 九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト (https://odekake-watcher.info/) より

図表3 時間分析（時間帯別来訪者数）ダッシュボード（福岡県内主要観光スポット：2025年1月1日～4月6日の例）



資料）九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト（https://odekake-watcher.info/）より

図表4 時間分析（昼間平均滞在時間）ダッシュボード（福岡県内主要観光スポット：2025年1月1日～4月6日の例）



資料）九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト（https://odekake-watcher.info/）より

「時間分析」では、観光スポットごとの時間帯別の来訪者数（図表3）や、昼間の滞在時間の長さ（図表4）などを把握することができる。観光スポットの性格、すなわち昼型か夜型か、ランチや夕食を伴うなど消費単価が高まる可能性があるか否かなどを見定めることができる。

図表3は、福岡県内の観光スポットの時間帯別の来訪者数を可視化したものである。下段で示すとおり、観光スポットごとの来訪時間帯の特徴、例えば太宰府天満宮は午前中心であること、キャナルシティ博多は来訪時間帯が長く、ホテルを併設していることから夜間も一定の滞在が続いていることなどがわかる。

図表4では、昼間滞在時間の長さを可視化でき、右の一覧のとおり、ゴルフ場や野球場、サッカー場などのスポーツ関連施設や公園等での滞在時間の長さがみえる。

これらの分析機能を組み合わせることで、個々の観光スポットの特徴を明確化できるとともに、今後の観光マーケティング戦略や具体的な打ち手を考える材料として用いたり、打ち手の前後比較で効果測定に用いたりすることができる。

## 4 おでかけウォッチャー（訪日版）の開発目標と特徴

2024年4月から、有償のプレミアムサービスとして、インバウンドの可視化を目指して、「おでかけウォッチャー（訪日版）」をリリースした。開発目標として、①日本政府観光局（JNTO）「訪日外客統計」との整合を取りつつ、都道府県、市町村、観光スポット単位での来訪動向の把握を目指すこと、②インバウンド特有の観光スポットを発見できるようにすること、③市町村間の周遊、および都道府県を越えた広域周遊の動線把握を目指すこと、④国籍別ならびに欧米豪・アジアなどの地理圏別の動向把握を目指すことなどを定めた。

基盤となるインバウンドデータについては、ブログ

ウォッチャーが開発した「デジタル観光統計（訪日版）」を活用している。同統計は、複数の訪日データソースを統合することで、国内最大規模の訪日GPSデータとなっている。観光スポットについても、日本観光振興協会「デジタル観光統計オープンデータ」に準拠した全国約6万カ所を設定し、全国を同一基準で比較分析できるように設計している。データ更新頻度は毎月1回、JNTO「訪日外客統計」の発表にあわせて、翌々月末にはデータ提供する仕様である。

## 5 おでかけウォッチャー（訪日版）の分析機能

訪日版の分析ダッシュボードは国内版とは異なる仕様としている。①基本情報分析、②広域ルート分析、③観光スポット分析、④メッシュマップ分析、⑤前後別周遊分析、⑥周遊率分析の6つを備え、インバウンドの特性、すなわち広域周遊の可視化ができるように工夫している。それぞれの分析視角は以下の通りである。

### ①基本情報分析

都道府県・市町村別にいつ、どの国籍の観光客が来訪したか分析可能。

### ②広域ルート分析

訪日外国人が都道府県間をどの順序・組み合わせで周遊したか分析可能。

### ③観光スポット分析

訪日外国人が観光スポット・ジャンル別にどこへ来訪したか分析可能。

### ④メッシュマップ分析

訪日外国人がどの地点（1kmメッシュや100mメッシュ）に来訪したか分析可能。

### ⑤前後別周遊分析

訪日外国人が自地域に滞在・通過した前後にどこで滞在していたか分析可能。

### ⑥周遊率分析

自地域に滞在した訪日外国人が、他にどこで滞在する比率が高いか分析可能。

図表5の「基本情報分析」では、九州地域（九州・沖縄・山口）の過去2年間（2023年1月～2024年12月）のデータを示しているが、右下の市町村単位での来訪者数が推計されている点が最大の特徴である（画面操作で都道府県単位に設定することも可）。特定市町村にフォーカスすると、市町村ごとに、来訪者数の推移や国籍別の来訪者数などの可視化ができる。集計区分として、宿泊・滞在・通過の区別や、延べ人数・実人数の区別も可能である。なお、日本政府観光局（JNTO）「訪日外客統計」と最も概念の近い集計区分は「滞在」、「実人数」である。

図表6は「広域ルート分析」を可視化したダッシュボードで、日本国内への滞在日数別に都道府県間の周遊パターンを明らかにすることができる。図表5と同様に九州地域の過去2年間のデータであるが、福岡県と大分県の2県のみでの周遊が10%超で最も多く、福岡県と熊本県の2県周遊、福岡県と大分県と熊本県の3県周遊が続くという傾向をみる事ができる。加えて、東京都と福岡県や東京都と沖縄県の周遊、大阪府と福岡県や広島県と福岡県の周遊も上位に位置するなど、九州外との繋がりもわかる。九州地域外との広域周遊の濃淡は、国内滞在日数の長短により変化すると想定されるが、フィルタリングで条件設定を変更することで、これらの可視化も可能である。

図表7は「観光スポット分析」で、インバウンド来訪先のさらなる掘り下げができる。図表5と同様に九州地域の過去2年間のデータでみると、キャナルシティ博多や沖縄の海洋博公園（沖縄県本部町）などが人気スポットとなっていることが把握できる。また、左下の国籍・ジャンル別構成では、国籍別に人気のジャンルの特徴の把握も可能である。韓国人と台湾人を比較すると、韓国人はスポーツアクティビティ（主にゴルフ）や温泉・スパの人気があり、台湾人は海水浴場や史跡・城跡・城郭などで人気があることがわか

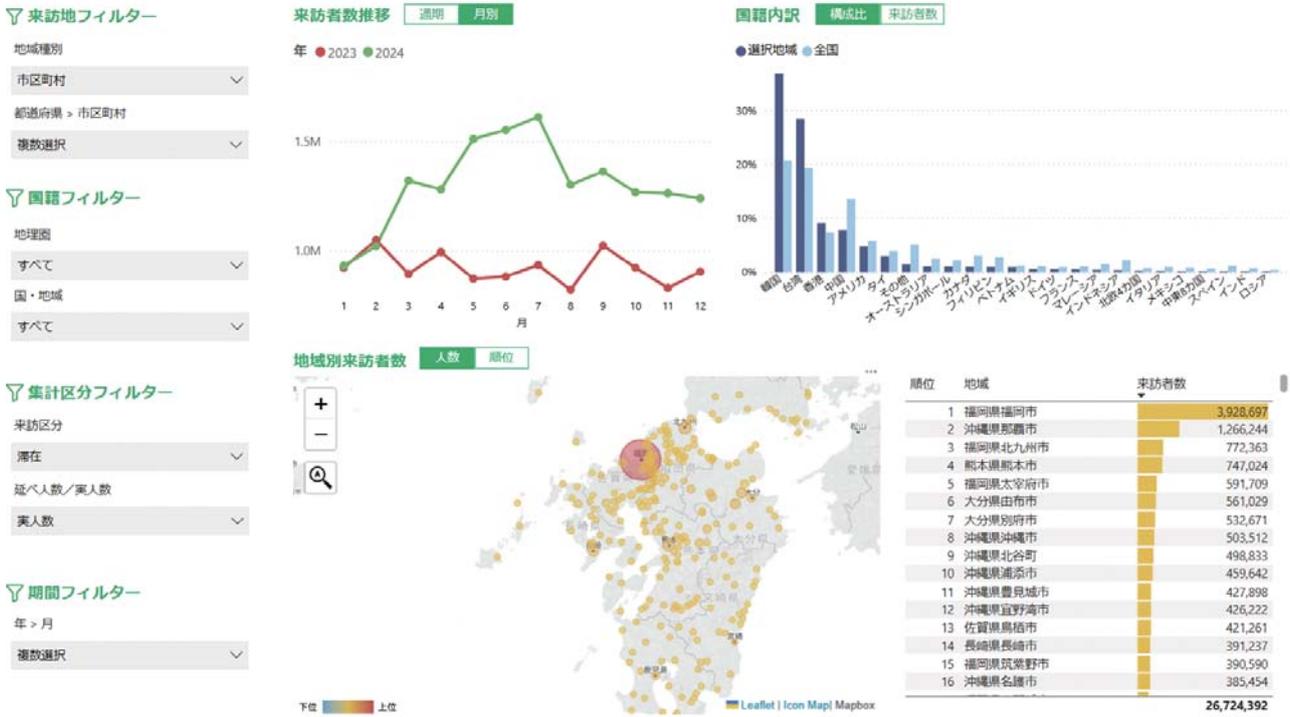
る。個別の観光スポットやそれらを束ねたジャンルの分析を深めることで、マーケティングターゲットの絞込や観光スポット開発のあり方の検討をすることができる。なお、データの母数の制約があるため、来訪者数の多いメジャーな観光スポットに限定されてしまうこと、来訪者数の少ない国籍や短期間の分析についてデータの振れ幅が大きいなどといった課題があり、この点は分析の際に留意が必要である。

図表8の「メッシュマップ分析」では、訪問先のホットスポットの把握や来訪者の通過経路を可視化することができる。これにより、立ち寄りや経由の仕掛けを行えるかどうかなどを検討することができる。図表5と同様に九州地域の過去2年間のデータでみると、北部九州では、福岡都市圏（糸島市や太宰府市、福津市など含む）や北九州・下関都市圏、佐賀市、唐津市、長崎市、佐世保市、熊本市、大分市、別府市などが来訪先のホットスポットとなっていることがわかる。その上で、阿蘇やくじゅう連山、小国や高千穂などの九州山地でのホットスポットや通過経路もあぶり出された。メッシュの来訪者数（メッシュ別平均月間来訪者数）をフィルタリングで制御するなどして、集客レベルの高いメッシュの絞込なども可能である。

図表9の「前後別周遊分析」では、特定の都道府県や市町村の来訪者がその前後でどの地域に来訪しているかを可視化できる。ここでは熊本市のデータを示しているが、図表5と同様に九州地域の過去2年間のデータでみると、前後とも福岡市の来訪者が飛び抜けて多く、以下、熊本市に隣接する菊陽町や熊本空港を有する益城町、阿蘇地域の多くの市町村（阿蘇市、南阿蘇村など）が名を連ねている。加えて、鹿児島市や久留米市、鳥栖市など県境を越えた広域的な移動も明らかになっている。

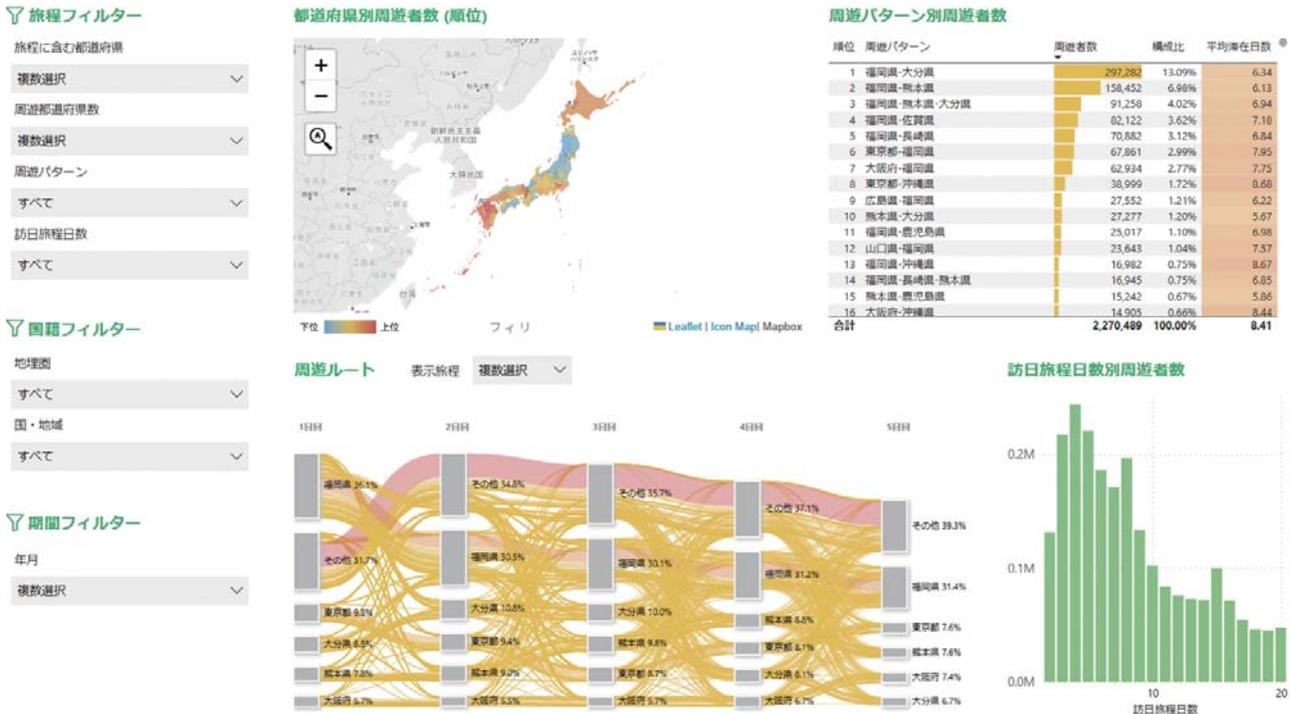
図表10の「周遊率分析」では、特定の都道府県や市町村の来訪者が旅程のなかで他の地域にどの程度の比率で訪れているかを可視化したものである。ここでは太宰府市のデータを示しているが、福岡市への周遊率は94%と非常に高く、隣接する筑紫野市や大

図表5 訪日版 基本情報分析ダッシュボード (九州・沖縄・山口：2023年1月～2024年12月の例)



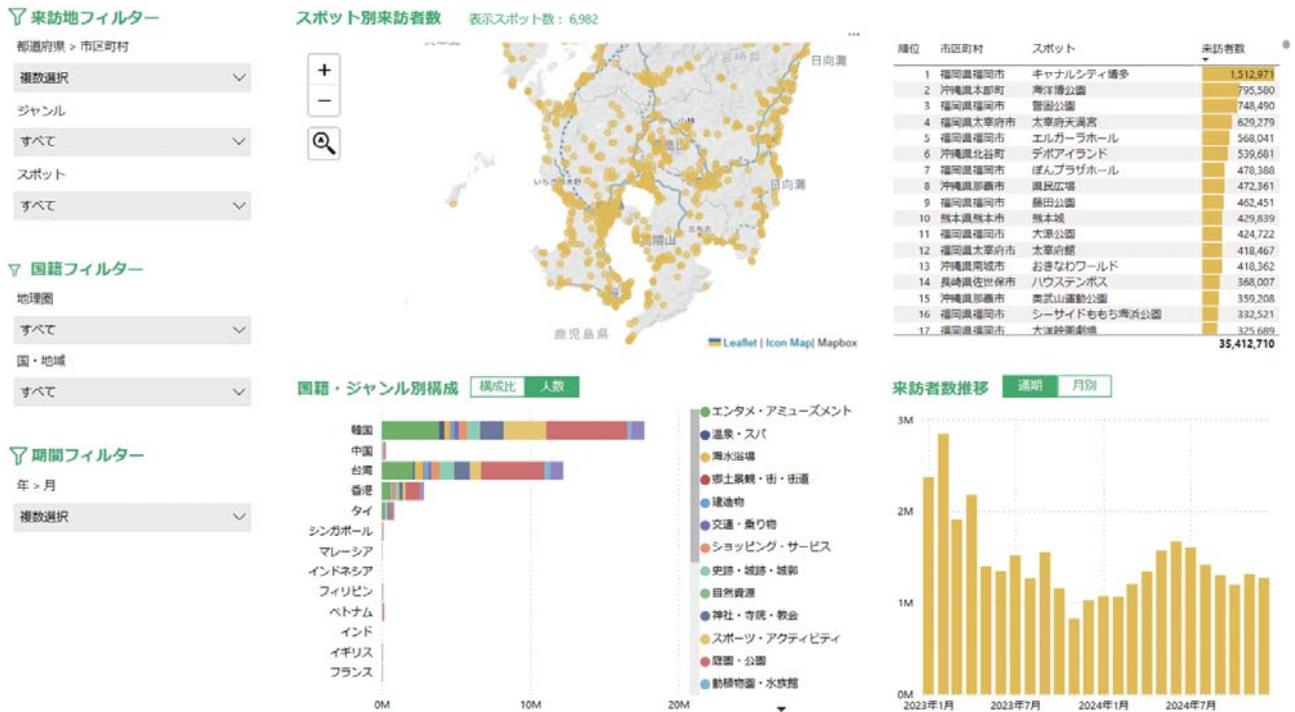
注) 日本政府観光局 (JNTO) 「訪日外客統計」と最も概念の近い集計区分である「滞在」、「実人数」の数値で表示  
資料) 九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト (https://odekake-watcher.info/) より

図表6 訪日版 広域ルート分析ダッシュボード (九州・沖縄・山口：2023年1月～2024年12月の例)



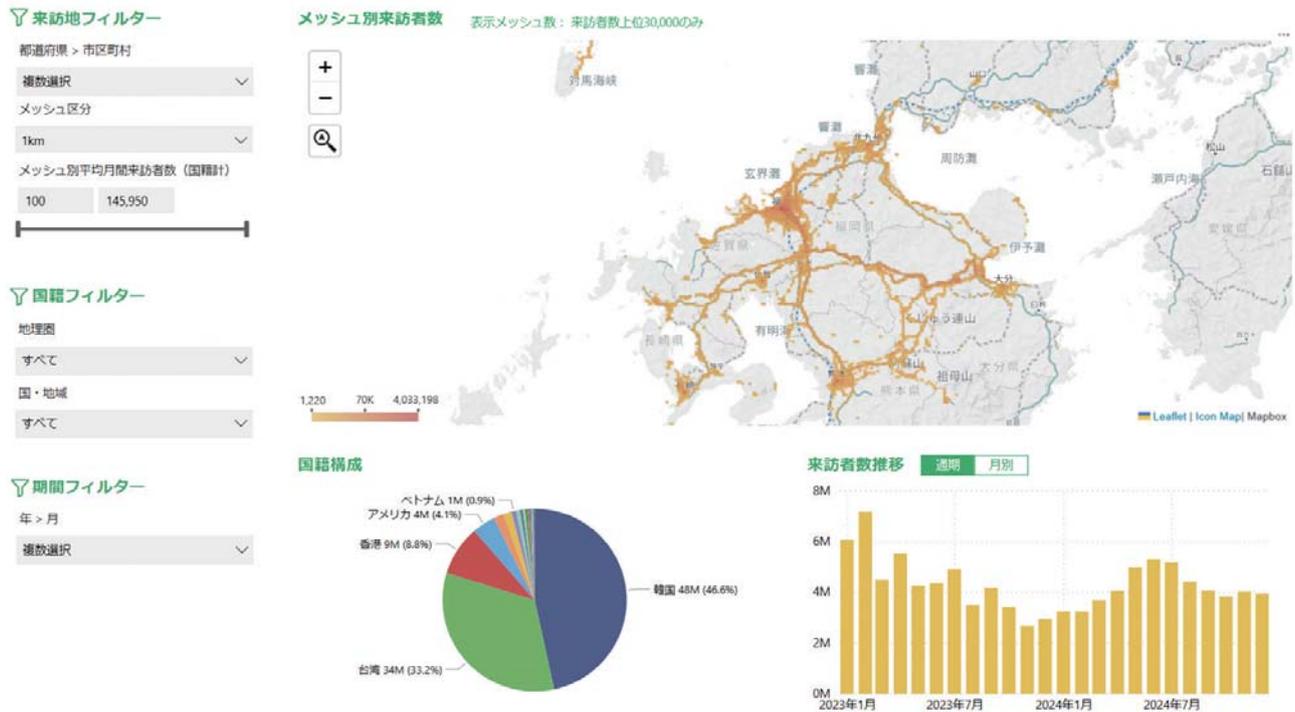
注) 複数都道府県に訪れた訪日外国人の人流データを抽出  
資料) 九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト (https://odekake-watcher.info/) より

図表7 訪日版 観光スポット分析ダッシュボード（九州・沖縄・山口：2023年1月～2024年12月の例）



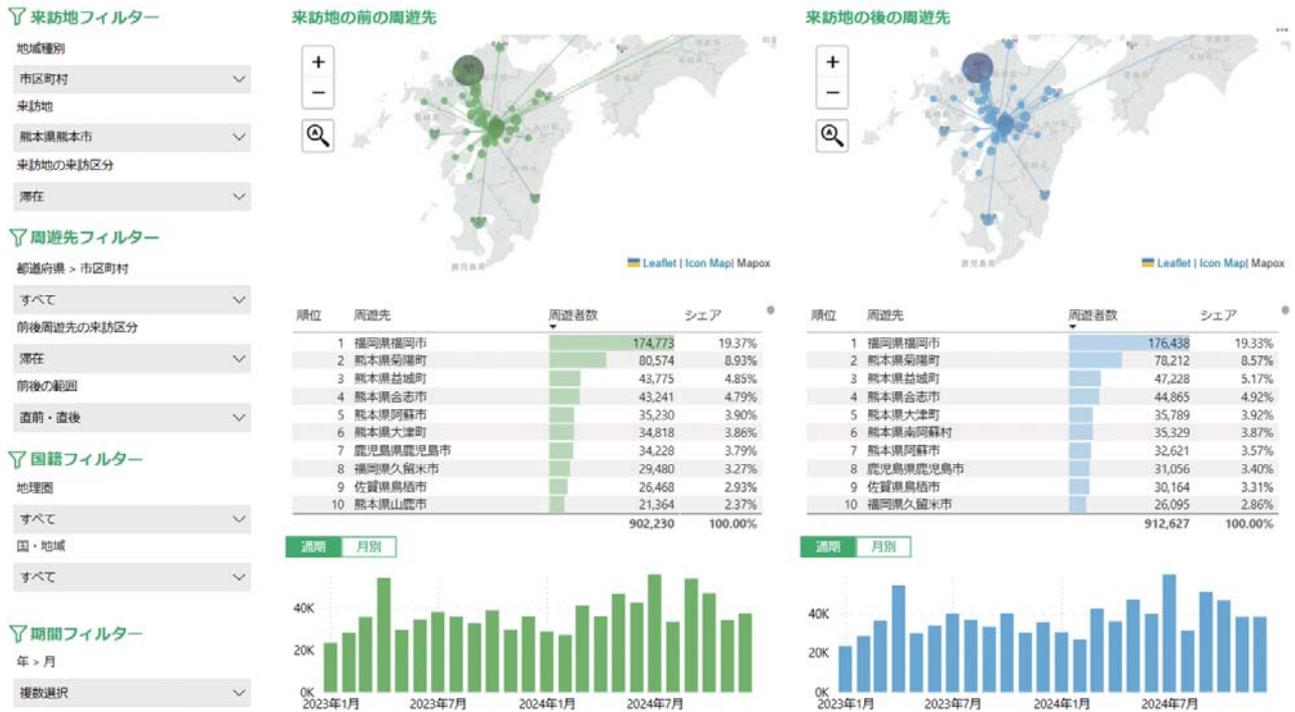
資料) 九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト (https://odekake-watcher.info/) より

図表8 訪日版 メッシュマップ分析ダッシュボード（北部九州・山口：2023年1月～2024年12月の例）



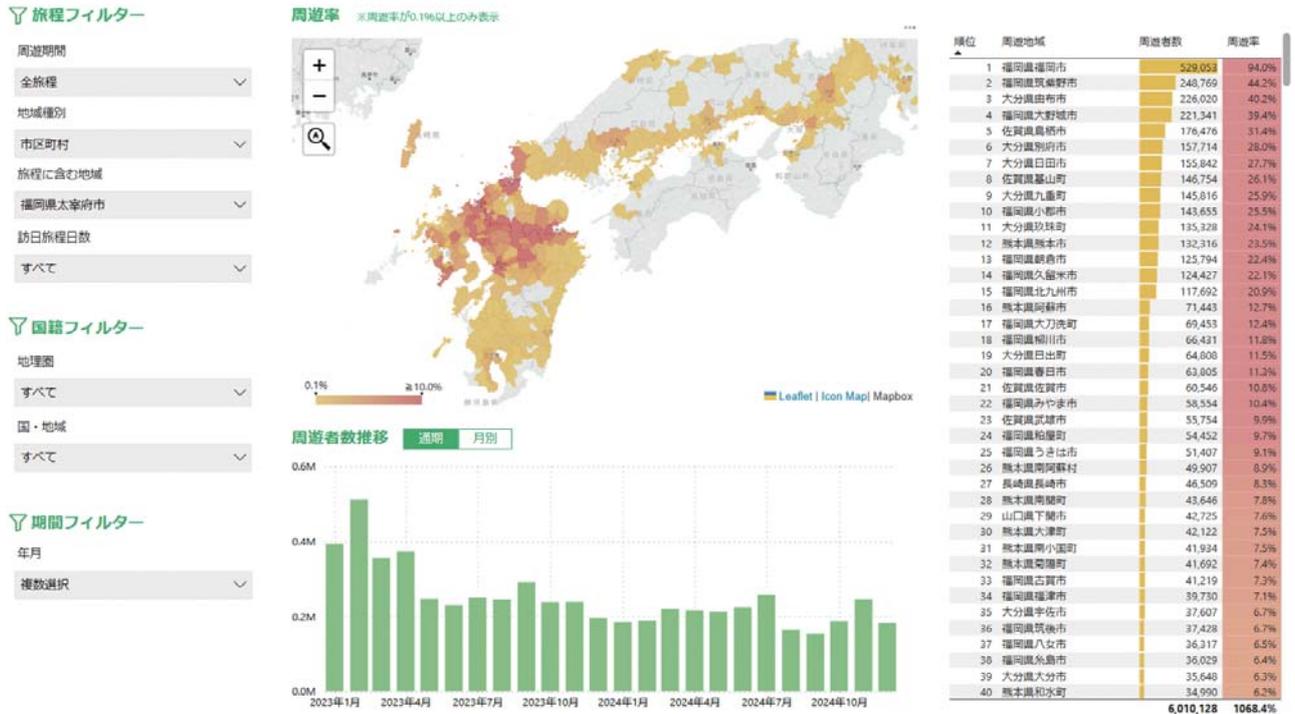
資料) 九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト (https://odekake-watcher.info/) より

図表9 訪日版 前後別周遊分析ダッシュボード（熊本市：2023年1月～2024年12月の例）



資料）九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト（<https://odekake-watcher.info/>）より

図表10 訪日版 周遊率分析ダッシュボード（太宰府市：2023年1月～2024年12月の例）



資料）九経調おでかけウォッチャーのWEBサイト（<https://odekake-watcher.info/>）より

野城市に加えて、由布市が40%以上の高い比率となっていることが明らかになった。加えて、20%以上の周遊率となっている地域も佐賀県・熊本県・大分県などの範囲で15市町村みられるなど、周遊パターンと繋がり広さや深さを新たな視点から可視化できる。

---

## おわりに

---

おでかけウォッチャーは、2021年10月27日にテストサイトをオープンし、2022年度からサービスを正式開始した新しいサービスである。開始から3年近くが経過するなかで、先述のとおり全国47都道府県の幅広いご利用をいただいている。

ユーザーの範囲も、当初は観光政策立案主体、すなわち政府機関や自治体、観光協会やDMOに限定していたが、2024年度からは研究機関や観光に携わる民間企業などにも広げている。ユーザーの皆さまの声を受けて、分析機能の追加や訪日版のリリースなど進めてきているが、課題も多い。訪日版に関しては、データの拡充や推計ロジックの検討などを進め、さらなる精度の向上が求められる。また、分析機能としては、レポート分析や観光消費分析などを求める声をいただいております。さらに有用な分析ツールとなるよう今後改善に努めたい。

観光行政や観光産業に関わる多くの方々にとって、おでかけウォッチャーが、データに基づく観光政策の立案と評価（EBPM）に役立つとともに、観光マーケティングや具体的な施策（打ち手）の立案、ならびに施策実行後の効果分析のための有用なツールとなり、持続可能な観光地経営と観光DXの実現につながれば幸いである。

岡野 秀之（常務理事 兼 調査研究部長）

渡辺 隼矢（調査研究部 主任研究員）

小柳 真二（下関市立大学 経済学部 准教授、  
調査研究部 客員研究員）